

「日本における天気予報の歴史」

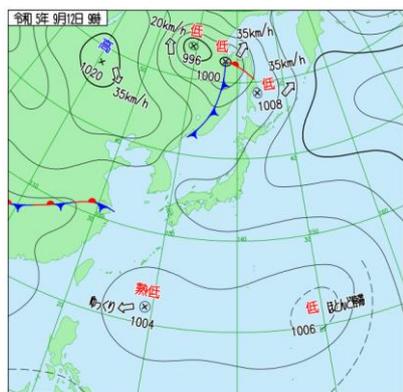
【第19回】日本における天気予報の歴史

皆さんは、今日の天気を知りたいとき、テレビを見たり、スマホで調べたりしているのではないのでしょうか。そこで今回は、天気予報が身近になるまでの歴史について述べたいと思います。

1600年代、温度計や気圧計が発明され、気象に関する研究が進み、1800年代半ばには、ヨーロッパやアメリカで天気予報が始まりました。日本では、明治5年（1872年）に我が国最初の気象観測所として北海道の函館に気候測量所が開設され、明治8年には、東京気象台に気象器械・地震計を据え付け、気象業務が開始されました。ドイツ人技師で航海士のクニッピングの尽力により、明治16年から気象電報を全国から収集できるようになり、同年、東京気象台で初めて天気図が作製され、翌年には毎日3回の全国の天気予報の発表が開始されました。最初の天気予報は、「全国一般風ノ向キハ定リナシ天気ハ変リ易シ但シ雨天勝チ」という日本全国の予想をたった一つの文で表現するもので、東京の派出所等に掲示されました。その後は、新聞やラジオが天気予報を取り上げたことで、どんどん身近になっていきました。

戦後は、1974年に地域気象観測システム(AMeDAS)が、1977年に静止気象衛星GMS(ひまわり)などが運用を開始し、気象に関する様々なデータを集められるようになりました。また、1959年には日本の気象庁でもコンピューターを導入したことで数値予報が開始され、天気予報の技術が向上していきました。その後は5～8年の間隔で最新のコンピューターに更新することで、計算能力が上がり、数値予報の精度を格段に向上させていきました。

ただ、現在においてもコンピューターの計算だけで正確な気象予報をすることはできません。最終的には、地域特性や過去の事例に詳しい私たち予報官が様々なことを検討し、予報を発表しています。今後、コンピューターの計算だけで天気現象を100%予報することが可能になる日は来るのでしょうか。



添付写真

左：令和5年9月12日の天気図
右：明治16年3月1日の日本初の印刷天気図

出典

気象庁 HP：気象庁の歴史、数値予報の歴史